

4-4 文化人類学

研究・教育活動の概要と特色

本専攻分野の研究・教育活動では、参与観察という人類学の基本的方法に立脚して社会のあり方を実証的に研究することに高い価値を置いている。

学部教育においては、概論を基礎とし、それに加えて二年次に基礎講読と基礎演習によって民族誌の読み方を学ばせ、三年時に演習と実習で文献研究と実態調査を平行して経験させ、その上に卒論を置くという積み重ね式のカリキュラムを組んでいる。

大学院教育においては、前期課程だけを履修する学生と後期課程まで進む学生では当然ながら目標設定と指導方法に違いがあるが、前者においては特定地域についてのこれまでの研究成果を総合的に学習することを中心とし、後者においてはその上に自らのフィールドワークを通して専門研究者としての独自の領域を開拓することを目標としている。いずれにおいても各自が独力で具体的な民族誌研究に取り組む力を養うことを重視し、それに向けて全員で進捗状況を報告しつつ研鑽する「院生研究会」を毎月1回開催しており、それに加えて各教員は個別のきめ細かな指導に心がけている。留学生の大学院進学者については、日本でフィールドワークを行い、民族誌的な修士論文・博士論文を作成することを促している。

2名の教員の専門領域はいずれも東アジアだが、大学院生の研究対象地域はアフリカやヨーロッパ、アメリカなど世界各地に広がっている。また学部・大学院を通じて海外留学を目指す学生が多いことも特徴である。

I 組織

1 教員数 (2009年9月末現在)

教授：2

准教授：0

講師：0

助教：1

教授：嶋陸奥彦、沼崎一郎

助教：久保田亮

2 在学生数（2009年9月末現在）

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
34	1	1	2	0

3 修了生・卒業生数（2005～2009年度）

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
05	6	0	1
06	10	3	2
07	13	0	1
08	13	5	0
09	1	0	0
計	43	8	4

* 2009年度は、9月末までの数字

II 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2005～2009年度）

1 博士学位授与

1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
05	0	0	0
06	2	0	2
07	0	0	0
08	0	0	0
09	0	0	0
計	2	0	2

* 2009年度は、9月末までの数字

1-2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

松本尚之、2006年度、『植民地時代以降の国家政策と社会 — ナイジェリア・イボ社会におけるエゼの誕生をめぐって — 』

審査委員：教授・嶋陸奥彦（主査）、教授・沼崎一郎、教授・吉原直樹・教授・和崎春日（名古屋大学）

川口幸大、2006年度、『文化をめぐる国家と村落社会の相互交渉 — 東南中国における死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織を通して — 』

審査委員：教授・嶋陸奥彦（主査）、教授・沼崎一郎、教授・鈴木岩弓、教授・瀬川昌久（東北大学東北アジア研究センター）

2 大学院生等による論文発表

2-1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
05	1	0	1 (単著)	1	3
06	5	1	0	2	8
07	3	1	0	2	6
08	0	2	0	1	3
09	0	0	0	0	0
計	9	4	1	6	20

*2009年度は9月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

2-2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
05	0	3	2	0	5
06	2	2	3	0	7
07	1	0	10	0	11
08	0	0	7	0	7
09	0	1	0	0	1
計	3	6	22	0	31

*2009年度は9月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

(1) 論文

- 松本尚之 「植民地経験と「チーフ」の土着化－非集権的なイボ社会の権威者をめぐって－」、『文化人類学』（旧民族学研究）、71、2006.
- 松本尚之 「現代ナイジェリアにおける祭りの政治性：新しい地域社会の形成とその文化の担い手たち」、『東北人類学論壇』6、2007.
- 川口幸大 「現代中国における清明節の墓祭祀－広東省珠江デルタの事例から－」、『東北人類学論壇』3、2004.
- 川口幸大 「龍舟競渡にみる現代中国の「伝統文化」－広東省珠江デルタのフィールドから－」、『中国 21』20、2004.
- 川口幸大 「共産党の政策下における葬送儀礼の変容と持続－広東省珠江デルタの事例から－」、『文化人類学』69、2004.
- 川口幸大 「現代中国の村落社会における春節」『東北人類学論壇』6、2007.
- Kawaguchi, Yukihiro, "Tradition as Cultural Capital: Dragon Boat Festival in Pearl River Delta, Guangdong," *Annual Report, 2006, The 21st Century Center of Excellence Program, Center for the Study of Social Stratification and Inequality, Tohoku University*. 2007.
- 久保田亮 「儀礼とダンスの断絶－宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」、『東北人類学論壇』4、2005.
- 久保田亮 「社交期としての冬－冬季娯楽活動にみるユピック／チュピックの社会生活の変化と持続」、『東北人類学論壇』5、2006.
- 久保田亮 「今日の客は誰だ？：ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」、『第20回北方民族文化シンポジウム報告』、2006.
- 久保田亮 「社交期としての冬－冬季娯楽行事にみるユピック／チュピック社会生活の変化と持続」、『東北人類学論壇』5、2006.
- KUBOTA, Ryo, "Performing Arts as the Symbol of Cultural Empowerment", *Center for the Study of Social Stratification and Inequality Annual Report 2006: 173-180*.
- 菅原順也 「変貌する社会の中の農村家族－韓国慶尚道高靈郡 A 面 B 村の C 氏の生活史－」、『東北人類学論壇』5、2006.
- 杉本 敦 「現代ルーマニア農村事情－山村のゴスボダリエの変容を中心に－」、『東北人類学論壇』8、2009.
- 王 煥 「伝統を伝えていく：仙台市における「雀踊り」保存団体の事例研究」、『東北人類学論壇』8、2009.

(2) 口頭発表

松本尚之 「イボ社会における同郷団体の歴史的変遷：自助活動の運営を巡る都市移民と母村の人々の関係」、日本文化人類学会第38回研究大会、2004.6.5.

松本尚之 「植民地経験と『首長』の称号：ナイジェリア・イボ社会における行政首長制の変遷」、東北人類学研究会、2004.6.25.

松本尚之 「称号授与のポリティクス：ナイジェリア・イボ社会におけるチーフの位置づけ」、第75回アフリカセミナー、2005.6.4.

松本尚之 「チーフにすること、なること：現代イボ社会における称号授与のポリティクス」、日本文化人類学会第40回研究大会、2006. 6. 3.

松本尚之 「植民地時代以降の国家政策と社会－ナイジェリア・イボ社会におけるエゼの誕生をめぐって－」、第119回東北人類学談話会（日本民族学会地区研究懇談会）2007. 3. 9.

Kawaguchi, Yukihiro, "Tradition as Cultural Capital?: Dragon Boat Festival in Pearl River Delta, Guangdong." Society for East Asian Anthropology, American Anthropological Association, (at Chinese University of Hong Kong,) Jul. 13, 2006

川口幸大 「宗族復興にみる現代中国の「歴史」・「文化」－二つの僑郷コミュニティの事例から」、日本華僑華人学会第3回研究会、2006. 7. 7.

川口幸大 「文化をめぐる国家と村落社会の相互交渉－東南中国における死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織を通して－」、第119回東北人類学談話会、2007.3. 9.

久保田亮 「個からみた伝統文化復興：民族舞踊「ヨガック」をめぐる語りの分析」、第15回東北人類学研究会、2004.12.27.

久保田亮 「民族舞踊をめぐる言説の歴史性－アラスカ先住民の事例検討」、東北文化研究会、2005.1.29.

Ryo KUBOTA, "Interpretation of Cup'ik Dances as Documentaries", Alaska Anthropological Association, 32nd Annual Meeting, Anchorage, March 12, 2005.

久保田亮 「民族舞踊が提示する『我々の暮らし』：アラスカ・チュピック村落の事例」、第20回東北人類学研究会、2005.5.6.

久保田亮 「民族舞踊が提示する『我々の暮らし』：アラスカ・チュピック村落の事例」、日本文化人類学会 第39回研究大会、2005.5.21.

久保田亮 「今日の客は誰だ？：ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」、第20回北方民族文化シンポジウム（北海道立北方民族博物館）、2005.10.23.

久保田亮 「フィッシュ・キャンプと『サブスタンス』」、国立民族学博物館共同研究会「『先住民』とはだれか？－先住民族イデオロギーの潜勢的／顕

在的形態とその社会歴史的背景に関する研究」、2005.11.19.

Ryo KUBOTA, "Injustice inherent in "subsistence" protection policy in Alaska," Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan, 2005.2.22.

久保田亮「『宣教師たちはダンスを禁止した』という歴史の見方ー相互作用の視点からの再考察ー」第25回中四国人類学談話会 シンポジウム「平等と不平等の構築をめぐるー人類学の地平から」、2006. 6.24.

久保田亮 「フィッシュ・キャンプがもたらすものーアラスカ先住民ユピックの「漁撈」再考ー」日本社会心理学会 第47回研究大会 シンポジウム「Well-beingを希求する人類のいとなみ」、2006. 9.17.

Kubota, Ryo, "Social Functions of School in a Native Village in Alaska", Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan (March 13, 2007).

杉本 敦 「ポスト社会主義ルーマニアにおける土地の利用と意味ートランシルヴァニアの山村の事例よりー」日本文化人類学会 第43回研究大会、2009.5.30.

3 大学院生・学部生等の受賞状況

なし

4 日本学術振興会研究員採択状況

2005年度 PD 受け入れ 1名

5 留学・留学生受け入れ

5-1 大学院生・学部学生等の留学数

2005年度

学部 3名 ウプサラ大学（スウェーデン）、コルドバ大学（アルゼンチン）、ハノイ外国語大学（ベトナム）

大学院 2名 ペンシルバニア大学（アメリカ合衆国）、ストラスブール大学（フランス）

2006年度

学部 2名 カリフォルニア大学（アメリカ合衆国）、天津大学（中国）、

大学院 1 名 ブカレスト大学（ルーマニア）

2007 年度

大学院 1 名 バルセロナ大学（スペイン）

2009 年度

学部 3 名 インドネシア大学（インドネシア）、雲南民族学院（中国）、
外国語学院（カナダ）

5-2 留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
05	1	0	1
06	2	0	2
07	0	1	1
08	1	0	1
09	2	1	3
計	6	2	8

6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
05	0	0	0
06	0	0	0
07	1	1	2
08	0	0	0
09	0	0	0
計	1	1	2

7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

7-1 専攻分野出身の研究者

渋谷 努 東北大学文学研究科 21st COE プログラム「社会階層と不平等研究」
研究員、2003 年度（2005 年度まで）

渋谷 勉 中京大学国際教養学部国際教養学科、教授、2009 年 4 月－

松本尚之 東北大学・大学院文学研究科、助手、2003－5 年度

松本尚之 東洋大学 国際共生社会研究センター 研究助手、2007年4月－
松本尚之 横浜国立大学教育人間科学部国際共生社会課程、専任講師、2009年
4月－
川口幸大 国立民族学博物館機関研究員、2007年4月－
久保田亮 東北大学・大学院文学研究科、助教、2007年10月.-

7-2 専攻分野出身の高度職業人

6名 翻訳業、外務省外郭団体、JICA、高校教員(3名)

8 客員研究員の受け入れ状況

なし

9 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10 刊行物

『東北人類学論壇』（年刊）

11 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2004年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（4回）
国際ワークショップ「長期的視野における韓国の地域社会伝統研究
－ 近世両班社会から現代都市へ －」

2005年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（3回）

2006年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（5回）

2007年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（5回）

2008年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（4回）

2009年度 東北人類学談話会事務局
東北人類学談話会研究会（5回予定）

1 2 専攻分野主催の研究会等活動状況

なし

1 3 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

文化人類学研究を支える基本は緻密なフィールドワークであり、博士学位論文に向けてのフィールドワークは研究者としての土台を形成する最も重要なステップである。従って専門研究者養成のための大学院教育はその準備と現地調査の実施を中心に組み立てなければならない。本研究科における文化人類学専攻分野は1993年度に新設されたが、草創期の試行錯誤段階を経て、博士課程前後期を通じた本格的な教育プログラム策定に至ったのは発足から5年目の1997年度だった。そのプログラムに従って前期課程において綿密な準備を行い、しっかりとした調査計画を練った学生たちがフィールドワークに出発していったのが2000年度前後であり、2年から3年のフィールドワークを終えて帰国した彼らがそれぞれの調査の結果をまとめて成果を発表し始めたのが2002～03年度以降のことである。つまり過去5年間というのは、本専攻分野にとっては97年度に策定したプログラムの成否が問われるまさに正念場だったといえる。

この期間に長期のフィールドワークを実施した博士課程後期在籍の学生は4名で、その調査地はナイジェリア、中国、アラスカ、韓国、ルーマニアの各地にわたっている。これらの学生による口頭発表および論文発表数が2002年度以降に顕著に伸びていることは、彼らが着実にそれぞれの調査の結果をまとめつつあることを示している。フィールドワークが長期にわたるのに比例して、その全体をまとめる作業にも時間がかかるが、学位請求論文は04年度に1本、06年度に2本提出されている。1名の学生がルーマニアに於いて2006～2008年度にわたる2年間の現地調査をおこなって帰国し、博士論文の執筆に取りかかっている。

フィールドワーク以外にも海外へ向かう学生たちの意欲はきわめて高いものがあり、学部・大学院を通じてほぼ毎年複数の学生が海外留学をしている。学部定員10名中の6名が留学を経験した学年もある。その留学先もアメリカ、スウェーデン、ベトナム、中国、韓国、メキシコ、アルゼンチン、ルーマニア、スペインなどきわめて多様である。

留学生の受け入れに関しても同様で、ほぼ毎年複数の学生を受け入れており、双方向的国際学術交流の実績を積んでいる。

本専攻分野が運営事務を引き受けている東北人類学談話会は日本文化人類学会の東

北地区懇談会という位置づけを受けて年間 5 回前後の研究発表会を開催しており、大学院生を主体とする東北人類学研究会も活発に活動を展開している。また研究成果発表のために 2002 年度に創刊した『東北人類学論壇』は、大学院生のフィールドワークに基づく学術論文を中心とするが、卒業論文のなかでも調査資料として貴重な成果をあげたものは研究ノートとして掲載している。このジャーナルは通常の製本雑誌態のほか、電子ジャーナルとしてホームページ上にも公開している。

Ⅲ 教員の研究活動（2005 年度～2009 年度）

1 教員による論文発表等

1- 1 論文

嶋 陸奥彦 「調査地に見る韓国社会の変容」、朝倉敏夫・岡田浩樹編『グローバル化と韓国社会－その内と外』、国立民族学博物館調査報告 69:17-29、2007.

嶋 陸奥彦 「アパート団地開発地区の露店商街」、伊藤亞人・韓敬九編『中心と周縁から見た日韓社会の諸相』、慶應義塾大学出版会、pp.39-65、2007.

嶋 陸奥彦 「家族・親族慣行にみる伝統の相互交渉－フィールドワークと文書のあいだ－」、『韓国朝鮮文化研究』6号、pp.92-123、2007.

嶋 陸奥彦 「韓国の地域社会の長期的展開－「門中の時代」再考－」、『東北人類学論壇』7:1-37、2008.

嶋 陸奥彦 「韓国農村における地縁的社会単位（“自然村／自然部落”）再考」、『東北人類学論壇』8:1-21、2009. 3.

沼崎 一郎 「家事・育児する男は少子化を止めるか？－変容する男性の結婚観・子ども観とその影響に関する試論－」『国際ジェンダー学会誌』第3号、pp.63-87、2005.9.

NUMAZAKI, Ichiro, “A Way of Life or A Matter of Discrimination?: Gender Inequality, Human Rights and the Cultural Politics of ‘National Tradition’ in East Asia,” *Annual Report 2005, Center for the Study of Social Stratification and Inequality, Tohoku University*, pp. 114-127, 2007.3.

久保田 亮 「儀礼とダンスの断絶－宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4: 1-20. 2005.3.

久保田 亮 「今日の客は誰だ？：ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」『第20回北方民族文化シンポジウム報告』pp.71-76. 2006.3.

久保田 亮 「社交期としての冬—冬季娯楽行事にみるユピック／チュピック
社会生活の変化と持続」『東北人類学論壇』5:1-17. 2006.3.

KUBOTA, Ryo, “Performing Arts as the Symbol of Cultural Empowerment”,
Center for the Study of Social Stratification and inequality Annual Report
2006, pp.173-180. 2007.3.

久保田 亮 「現代ユピックの「生き方」と金鉱開発プロジェクト」 pp.161-192,
岸上伸啓編著『みんなく実践人類学シリーズ4 北アメリカ先住民の社会経
済開発』明石書店, 2008.11.

久保田 亮 「法概念「サブシステム」の成立—先住民権保障へのドミナント
文化の影響」『東北人類学論壇』8:22-53.2009.3

久保田 亮 「チュピック村落社会の学校にみる先住民の自律」窪田幸子・野林
厚志編『「先住民」とは誰か』世界思想社, 2009.10 (印刷中) .

1- 2 著書・編著

嶋 陸奥彦『韓国 道すがら』、草風館、2006.

SHIMA, Mutsuhiko (ed.), *Status and Stratification: Cultural Forms in East and Southeast
Asia*, Melbourne, Australia: Trans Pacific Press, (2008.3.)

嶋 陸奥彦『韓国社会の歴史人類学』、風響社、(2010.2.刊行予定)

沼崎 一郎『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド—あなたにで
きること、あなたがすべきこと—改訂増補版』嗟峨野書院, 2005.5.

沼崎 一郎『「ジェンダー論」の教え方ガイド—女子大生のための性教育とエン
パワーメント—』フェミックス, 2006.11 (フェミックスブックレット1) .

1- 3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

嶋 陸奥彦 「伊藤亜人さんの人類学と韓国研究」、伊藤亜人先生退職記念論文
集編集委員会(編)『東アジアからの人類学』、風響社、pp.291-298、2006.3.

嶋 陸奥彦 「人類学と朝鮮社会史 — 個人的越境の体験 —」、『朝鮮史研
究会論文集』第47輯、pp.5-21, 2009.10.

嶋 陸奥彦 「列車はどこへ?」、『韓国朝鮮の文化と社会』8号、pp.230-234, 2009.10.

沼崎 一郎 「アカデミック世界のマイノリティ (第21回) セクハラ加害者を訴
える(その1)—裁判はどのように進むのか」『科学』第75巻4号、pp.515-518,
2005.4.

- 沼崎 一郎 「アカデミック世界のマイノリティ (第 22 回) セクハラ加害者を訴える (その 2) —裁判でできること、できないこと」 『科学』 第 75 巻 4 号, pp.620-623, 2005.5.
- 沼崎 一郎 「書見台 エレン・ペンス&マイケル・ペイマー著 波田あい子監訳『暴力男性の教育プログラム—ドゥルース・モデル』」 『アディクションと家族』 21 巻 3 号, pp.316-321, 2004.11.
- 沼崎 一郎 「高校から大学へ」 中村捷編『人文科学ハンドブック—スキルと作法—』 pp.8-13, 2005.3.
- 沼崎 一郎 「桑山敬己著 Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony」 『文化人類学』 70 巻 2 号, pp.285-289, 2005.9.
- 沼崎 一郎 「第 2 分科会 加害者処罰と再教育制度—加害者に厳格な処罰を」 (牧下徳子と共著) 全国シェルターシンポジウム in あいち実行委員会編『全国シェルターシンポジウム 2005 in あいち 報告集』, pp.49-59, 2006.7.
- 沼崎 一郎 「政治と権力」 綾部恒雄・桑山敬己編『よくわかる文化人類学』 ミネルヴァ書房, pp.100-109, 2006.10.
- 沼崎 一郎 「文化相対主義」綾部恒雄編『文化人類学 20 の理論』弘文堂, pp.55-72, 2006.12.
- 沼崎 一郎 「なぜ男はセクシュアル・ハラスメントを「選ぶ」のか—セクハラ加害者の実像と対策」 労働教育センター『季刊 女も男も—自立・平等—』 第 109 号, pp.54-59, 2007.5.
- 沼崎 一郎 「家庭におけるハラスメント対策—DV 被害者支援の教訓—」 『メンタルヘルスの社会学』 第 13 巻, pp.5-8, 2007.11.
- 沼崎 一郎 「台湾の新しい不平等」 原純輔・佐藤嘉倫・大淵憲一編『社会階層と不平等』 放送大学教育振興会, pp.137-150, 2008.3.
- 沼崎 一郎 「書見台 信田さよ子著『加害者は変わるか—DV と虐待をみつめながら—』」 『アディクションと家族』 25 巻 3 号, 2008.10.
- 沼崎 一郎 「現代台湾のエスニシティと政治—書評『台湾外省人の現在』—」 『東方』 334 号, 2008.12.
- 沼崎 一郎 「意思決定」 日本文化人類学会編『文化人類学事典』 丸善書店, 2009.10.
- 沼崎 一郎 「文化相対主義」 日本文化人類学会編『文化人類学事典』 丸善書店, 2009.10.

沼崎 一郎 「男性と暴力」加藤千香子・細谷実編『ジェンダー史叢書5 暴力と戦争』明石書店、2009.10.

沼崎 一郎 「なぜ加害者は暴力をふるうのか」石井朝子編『DV支援者ガイドライン』明石書店、2009.11（印刷中）。

沼崎 一郎 「同時代の男性学 殺す男たち」天野他編『新編日本のフェミニズム12 男性学』岩波書店、2009（近刊）。

久保田 亮 「先住民社会の光と影 岸上伸啓著『イヌイト 「極北の狩猟民」の今』」『民博通信』115：25. 2006.12.

久保田 亮 「ヨガックでもてなし」『月刊みんぱく』2007年5月号, pp.6-7.

1-4 口頭発表

嶋 陸奥彦 「アパート団地開発地区の露天商街：韓国の都市化の一断面」、第111回東北人類学談話会、2005.7.16.（東北大学）

SHIMA, Mutsuhiko, "A Streetside View on Globalization in Korea", Harvard-Yenching International Conference in Seoul, "*East Asia in Globalization: Conflicts and Compromises*", 2005.10.7. Seoul National University, Seoul, Korea.

嶋 陸奥彦 「フィールドワークと文書のあいだ」、韓国・朝鮮文化研究会第6回研究大会シンポジウム『文字と無文字のあいだ』、2006.10.28.（東京大学）

嶋 陸奥彦 「人類学と朝鮮社会史 - 個人的越境の体験 -」、朝鮮史研究会第45回大会講演、2008.10.25.（仏教大学）

嶋 陸奥彦 「全南羅州郡文平面雲峰里龍土村大洞契冊에 관하여」国立韓国学中央研究院第48回海外韓国学 콜로키움、2009.3.5.

嶋 陸奥彦 「家族関係から見た奴婢の姿 - 17世紀末～18世紀前半の大丘戸籍の事例から -」朝鮮史研究会関東部会月例会、2009.5.16.

嶋 陸奥彦 「韓国 - 急変する社会の姿 -」、斎理蔵の講座、2009.10.3.

嶋 陸奥彦 「振り返る始まり、そしてその後」、国立民族学博物館共同研究特別シンポジウム『韓国研究の回顧と展望』、国立民族学博物館、2010.2.6.

NUMAZAKI, Ichiro, "Re-representing Violence as Violence: Cultural Struggle against Wife Battering in Japan Today", *Annual Meeting of the American Anthropological Association*, December 1, 2005.

沼崎 一郎 「日本社会におけるジェンダーとセクシュアリティの現状と課題」日本性科学会第26回学術集会シンポジウム、2006.11.19.

沼崎 一郎 「自由の実践としてのフェミニズム教育」関係性の教育学会シンポジウム、2007.3.11.

沼崎 一郎 「男性性の理論と人類学—「奇妙な男」の記述を超えられるか?—」日本文化人類学会、名古屋大学、2007.6.2.

沼崎 一郎 「丈夫（ますらを）と手弱女（たをやめ）の反復～日本的男性性の多様な源流？」男性性研究フォーラム、立教女学院短期大学、2007.12.1

沼崎 一郎 日本ジェンダー法学会プレ企画「DV殺人と正当防衛論」にて報告、お茶の水女子大学、2007.12.7.

沼崎 一郎 国際ジェンダー学会「ワークショップ：“ジェンダー”を語り合う～学ぶ立場から、教える立場から」にて報告、立教大学、2008.9.13.

NUMAZAKI, Ichiro, "Cultural Models of Spousal Abuse: An Examination of Cases from Non-Western Societies", *Annual Meeting of the American Anthropological Association*, November, 19-23, 2008.

沼崎 一郎 日本ジェンダー法学会プレ企画「DV殺人と正当防衛論Ⅱ」にて報告、立命館大学、2008.12.5.

沼崎 一郎 「男性性の暴力的構築—秋葉原“通り魔殺人”事件を例として」男性性研究フォーラム、関東学院大学、2008.12.20.

KUBOTA, Ryo, "Position of the Eskimos in American Society Today: Ethnographic Examination on the Ethnic Dance in Cup'ik Village, Alaska", Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan, September 13, 2004.

久保田 亮 「エスキモー・ダンス：アラスカ州チバック村の事例から」第106回東北人類学談話会、東北大学、2004.10.15.

KUBOTA, Ryo, "An Analysis of the Ethnic Dance in a Contemporary Cup'ik Village", Anthropological Colloquium, the University of Alaska Fairbanks, November 5, 2004.

久保田 亮 「個からみた伝統文化復興：民族舞踊「ヨガック」をめぐる語りの分析」第十五回東北人類学研究会、東北大学、2004.12.27.

久保田 亮 「民族舞踊をめぐる言説の歴史性—アラスカ先住民の事例検討」東北文化研究会、東北芸術工科大学、2005.1.29.

KUBOTA, Ryo, "Interpretation of Cup'ik Dances as Documentaries", Alaska Anthropological Association 32nd Annual Meeting, Hilton Anchorage Hotel, March

12, 2005.

KUBOTA, Ryo, "Performing Arts as the Symbol of Cultural Empowerment", Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan, March 28, 2005.

久保田 亮 「民族舞踊が提示する『我々の暮らし』：アラスカ・チュピック村落の事例」 日本文化人類学会第 39 回研究大会、北海道大学、 2005.5.21.

久保田 亮 「今日の客は誰だ？：ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」 第 20 回北方民族文化シンポジウム「文化の十字路－北太平洋沿岸の文化－」、北海道立北方民族博物館、 2005.10.23.

久保田 亮 「フィッシュ・キャンプと『サブシスタンス』」国立民族学博物館共同研究会「『先住民』とはだれか？－先住民族イデオロギーの潜勢的／顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究」、国立民族学博物館、2005.11.19.

KUBOTA, Ryo, "Injustice inherent in "subsistence" protection policy in Alaska", Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan, February 22, 2006.

久保田 亮 「『宣教師たちはダンスを禁止した』という歴史の見方－相互作用の視点からの再考察－」第 25 回中四国人類学談話会 シンポジウム「平等と不平等の構築をめぐって～人類学の地平から」、広島大学、2006.6.24.

久保田 亮 「フィッシュ・キャンプがもたらすもの－アラスカ先住民ユッピクの「漁撈」再考－」日本社会心理学会第 47 回研究大会 シンポジウム「Well-being を希求する人類のいとなみ」、東北大学、2006.9.17.

KUBOTA, Ryo, "Social Functions of School in a Native Village in Alaska", Center of Social Stratification and Inequality Workshop, Tohoku University, Sendai, Japan, March 13, 2007.

久保田 亮 「チュピック・エスキモー村落の「学校」－アラスカ先住民の社会的位置に関する一考察」、国立民族学博物館共同研究会「『先住民』とはだれか？－先住民族イデオロギーの潜勢的／顕在的形態とその社会歴史的背景に関する研究」、国立民族学博物館、 2007.10.20.

久保田 亮 「バックステージからみる「先住民の集い」－アラスカ先住民・チュピックの社会関係に関する考察」、日本文化人類学会地区研究懇親会・第 126 回東北人類学談話会 シンポジウム「連帯（つながり）の文化人類学－社会関係の持続と変容」、東北大学、2008.11.29.

久保田 亮「ユッピック舞台芸術の「知的所有権」－エスキモー・ダンスの創作・流通・消費をてがかりに」、国立民族学博物館共同研究会「カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題－国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して」、天理大学、2009.7.12.

2 教員の受賞歴（2005 年度～2009 年度）

なし

IV 教員による競争的資金獲得（2005 年度～2009 年度）

（1）科学研究費補助金

嶋 陸奥彦 平成 17～19 年度 基盤研究（C）「韓国家族の歴史人類学的研究－奴婢階層の家族を中心に－」（研究代表者）

嶋 陸奥彦 平成 20～22 年度 基盤研究（B）「現代社会における異文化共生の公共人類学的研究－東アジアと北アメリカの比較－」（研究代表者）

沼崎 一郎 平成 15～17 年度 萌芽研究「ドメスティック・バイオレンスが子ども性の性別役割形成に与える影響に関する実態調査」（研究代表者）

沼崎 一郎 平成 18～21 年度 基盤研究（C）「人権概念の比較文化的研究」（研究代表者）

沼崎 一郎 平成 20～22 年度 基盤研究（B）「現代社会における異文化共生の公共人類学的研究－東アジアと北アメリカの比較－」（研究分担者）

久保田 亮 平成 20 年度若手研究 B 「アラスカ先住民ユッピックによるコミュニティ発展に資する文化資源利用の研究」（研究代表者）

久保田 亮 平成 20～22 年度 基盤研究（B）「現代社会における異文化共生の公共人類学的研究－東アジアと北アメリカの比較－」（研究分担者）

（2）その他

久保田 亮 平成 16 年度東北大学 COE 特別研究奨励費「周縁化と主体化－エスキモーの社会的地位とその是正をめぐる文化人類学的研究－」

久保田 亮 平成 17 年度東北大学 COE 特別研究奨励費「エスキモーの社会的地位とその是正をめぐる文化人類学的研究」

久保田 亮 平成 18 年度東北大学 COE 特別研究奨励費「エスキモーの社会的地位

とその是正をめぐる文化人類学的研究」

V 教員による社会貢献（2005年度～2009年度）

嶋 陸奥彦 2004年8月～2006年7月 独立行政法人 日本学術振興会 特別
研究員等審査会専門委員（2005年6月22日より、独立行政法人 日本学術振
興会 国際事業委員会 書面審査員 に変更）

嶋 陸奥彦 2007年8月～2008年7月 独立行政法人 日本学術振興会 特別研
究員等審査会専門委員および国際事業委員会書面審査委員。

沼崎 一郎 キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク（ボラ
ンティア活動）（1997-）

沼崎 一郎 メンズ・サークル・みやぎ（ボランティア活動）（1998-）

沼崎 一郎 仙台女性への暴力防止センター（ボランティア活動）（2002-）

沼崎 一郎 内閣府男女共同参画局委託調査研究事業 千葉県「地域における配
偶者からの暴力の加害者更生に関する調査研究」スーパーバイザー（2004.10
～2005.3）

沼崎 一郎 内閣府男女共同参画局「配偶者からの暴力の加害者更生に関する検
討委員会」講師（2005.12.13）

沼崎 一郎 内閣府男女共同参画局アドバイザー派遣事業派遣講師（2006～2009）

VI 教員による学会役員等の引き受け状況（2005年度～2009年度）

SHIMA, Mutsuhiko, Contributing Editor, *Korean and Korean-American Studies*

Bulletin, New Haven, USA: East Rock Institute (1985.11.～現在)

嶋 陸奥彦 東北人類学談話会世話人（1996.4.～2009.5）

嶋 陸奥彦 日本文化人類学会 評議員（2004.4.～2008.3）

嶋 陸奥彦 日本文化人類学会 理事（2004.4.～2006.3.）

嶋 陸奥彦 韓国・朝鮮文化研究会理事（2004.4.～2006.9.）

嶋 陸奥彦 韓国・朝鮮文化研究会運営委員（2000.10.～現在）

嶋 陸奥彦 比較家族史学会理事（2002.4.～現在）

嶋 陸奥彦 『韓国朝鮮の文化と社会』編集代表（2007.10.～現在）

嶋 陸奥彦 比較家族史学会第50回記念大会実行委員長（2008.6.21～22.）

沼崎 一郎 アジア政経学会評議員（2001.10～2005.9）

沼崎 一郎 現代中国学会理事（2005.10～現在）

沼崎 一郎 日本台湾学会幹事 (1999.4～現在)

沼崎 一郎 日本文化人類学会 評議員 (2008.4.～現在)

Ⅶ 教員の教育活動 (2009 年度)

(1) 学内授業担当

教授 嶋 陸奥彦

- 1 大学院授業担当 文化人類学研究演習Ⅰ・Ⅱ、文化人類学特論Ⅲ
- 2 学部授業担当 文化人類学概論、文化人類学基礎講読、文化人類学実習
- 3 共通科目・全学科目授業担当 原書講読入門

教授 沼崎 一郎

- 1 大学院授業担当 文化人類学調査実習Ⅰ・Ⅱ
- 2 学部授業担当 文化人類学基礎講読、文人基礎演習、文化人類学演習、英語原書講読入門
- 3 共通科目・全学科目授業担当 文化人類学、言語表現論

助教 久保田 亮

- 2 学部授業担当 人文社会序論、文化人類学基礎講読

(2) 他大学への出講 (2005 年度～2009 年度)

教授 嶋 陸奥彦

放送大学宮城学習センター講師 「時代と知 - 文化人類学の成立」(2006 年度)
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 「韓国社会の歴史社会人類学」
(2007 年度)

教授 沼崎 一郎

福島県立医科大学 「文化人類学」 (2001～2007 年)
宮城教育大学 「文化人類学」 (2001～2007 年)
宮城学院女子大学 「ジェンダー論」 (2001～2009 年)
宮城学院女子大学 「現代社会と性」 (2004～2008 年)

助教 久保田 亮

東北学院大学 「文化人類学」 (2009 年～)